

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニューズレター
1996.6.1
38

情報知識学会事務局 発行〒110 東京都台東区台東 1-5-1(凸版印刷(株)内) TEL03(3835)5692 FAX03(3837)0368 ISSN0915 1133

目 次

巻頭言: データベースの変遷と地球科学	1
報告: 平成8年度 情報知識学会研究報告会	3
・研究報告会レポート	3
・発表論文要旨	5
報告: 平成8年度総会議事録および資料	9

【巻頭言】

データベースの変遷と地球科学

奈良大学社会学部 西脇二一

大型コンピュータが登場した頃の地球科学分野のデータベースといえば、気象観測データや重力探査データなどの計測値を磁気テープに収納するものか、あるいは、岩石や鉱物の化学分析値などを個人用のファイルに収納するものでしかなかった。前者は定期的あるいは連続的に収集されるもので、容量が極めて大きくなるのに対し、後者は分析に手間がかかるため一般に容量が小さいものが多かった。いずれも、基本的には数値情報が中心で、文字情報も一部しか入力されていなかった。この段階では、扱われている内容が地球科学分野のデータであることを除けば、これらのデータベースには地球科学特有の構造や機能はほとんどなく、利用者も一部の専門家に限られていた。

その後、リモートセンシングなどの新しい計測技術の開発や、機器分析法の改良・自動化によって、地球科学データに質的・量的変化が生じてきた。時を同じくして、コンピュータの急速な発展により画像情報や音声情報の入力が可能となり、地図・写真・分析チャートなど地球科学に欠かすことのできない情報を含んだデータベースが構築されるようになった。この段階になって、扱われているデータが地球科学分野のものであるだけでなく、地球科学特有の構造や機能を持ったデータベースが登場したことになる。

ここ数年、ハードウェア、ソフトウェアの急速な発展によって、扱えるデータの内容が多様化するとともに、入力・検索・表示などの機能もより高性能で使い易いものになっており、地球科学分野でも各種のデータベースが利用可能になっている。ネットワーク上で公開されるものも増えてきており、専門家以外でも利用できるようになってきたことは嬉しいことである。

この流れの中で、地球科学の中の複数の分野のデータベースを結合したり、地球科学以外の分野のデータベースと結合して利用しようとする動きが出てきている。前者の例としては、地

形・地質のデータと人工衛星データや物理探査データを結合して鉱床探査に用いるものがある。後者の例としては、地図情報や地質・構造データとガスや水道などの地下埋設物の配置および工事記録とを重ね合わせて、地下埋設物の安全で経済的な設計・管理に利用するものがある。地球科学は本来的に総合科学であり、複数の異質な情報を扱うことは当然であるが、後者の例では、扱われる情報が地球科学の研究分野だけでなく、地球科学そのものの範囲を大きく外れていこうとしているのである。

10年ほど前、ある地質コンサルタント会社から地下埋設物データベースについて相談された時には、そのようなデータベースが必要になってきていることは分かるが、なぜそれを地質コンサルタントがやらねばならないのか、これを従来の地球科学分野のデータベースとうまく結合するには相当の時間がかかるのではないかと、思っていたが、すでに現実のものとなり、地質コンサルタントの重要な部門となっている。これは、データベースの発展が、従来の業務の枠を取り外してしまった好例といえよう。

このように、データベースをめぐる環境の変化によって、学問分野の領域の変更を余儀なくされる例は他の分野でも多くなってくるであろう。情報というものの力を思い知らされると共に、それが新たな発展の契機となることを期待している。

.....

人文学へのコンピュータ応用の先端誌

Literary and Linguistic Computing

from..... Oxford University Press

コンピュータはすでに人文諸学でも必須のツールとなっています。Association for Literary and Linguistic Computing の公式機関誌 *Literary and Linguistic Computing* は文学・言語学へのコンピュータ応用のトップ誌としてこの領域を牽引してきました。電子テキスト、テキストエンコーディング、ソフトおよびハードからテキスト分析・意味論・統語論に至るあらゆる領域の最新の研究成果が論じられるばかりでなく、学会レポート、書評、ノート等学会機関誌らしい多彩な情報が掲載されます。

◇電子オーダー: jnlorders@oup.co.uk

..... 日本支社にファクシミリでご注文頂くこともできます。

下記ご記入の上、このまま

FAX: 03-5995-3415 (Oxford University Press) までお送りください。

Literary and Linguistic Computing (個人購読価格: 1年 \$65・2年 \$130)

購読希望 サンプル希望 (○でお示しください)

ご氏名: _____

所属: _____

FAX: _____

【報告】

平成8年度 情報知識学会研究報告会

研究報告会レポート

情報知識学会理事 藤代 一成 (お茶の水女子大学)
情報知識学会副会長 藤原 譲 (筑波大学)

本年度の研究報告会は、去る平成8年5月25日(土)に、凸版印刷本社ビル1階ホールにて、62名(内、学会員53名)の参加者を得て予定通り開催された。当日の様様を本報告会の実行委員を代表して簡単に報告する。

今回の研究報告会の主題は、情報スーパーハイウェイやマルチメディアの行く方を示す「情報の可視化」であり、関連する講演を含めて6セッション計12件の発表があり、実機を用いたオンサイトデモ等による多彩なプレゼンテーションと内容の濃い活発な討議が繰りひろげられた。当日の各セッションの座長・司会を務めていただいた副会長・理事の方々からの報告を以下順に掲載する。別稿の論文要旨と併せてご覧いただきたい。なお、各論文を収めた講演論文集は、学会事務局より入手可能である(会員は一部2,000円、非会員は一部3,000円)。

セッションI: 情報の可視化

座長: 藤原 譲 (筑波大学)

本セッションでは、「情報の可視化」に関する二つの総合講演が行なわれた。最初の講演の題目は「Scientific visualization から Information visualization へ」であり、お茶の水女子大の藤代が、科学技術における大量の数値データの理解と利用支援のために始められた可視化の技術を、アルゴリズム、ビジネスデータ、さらに人間-機械、人間-人間の知的共同活動までを対象として拡大されつつあるこの分野の現状、IEEEのInformation Visualization SymposiumやACMのWorkshop on New Paradigms in Information Visualization and Manipulationなどの国際的な動向、代表的システムとしてXerox PARCのInformation Visualizerなどの説明と今後知識増幅(Intelligent Amplification)インターフェイス技術としての位置付けなど具体的な例とともに示した。次の講演はケー・ジー・ティーの黒木 勇氏が事実上の標準として国際的に普及している可視化ツールであるAVS/Expressについて各種の事例を中心に具体的な機能の説明が行われた。AVS/Expressの動作環境はWindows/NTからUNIX、スーパーコンピュータと広く、ビジネスデータや科学技術の分野で利用できる汎用のものである。とくにインターネット上での情報の公開、収集、解析、プレゼンテーションなどに有効であることも述べられた。

セッションIIA: 情報の構造と表現

座長: 小山 照夫 (学術情報センター)

本セッションでは、化学反応と連歌という二つの対象についての情報モデルが紹介された。本学会は様々な種類の情報を様々な立場から、取りあつかうという特徴をもつが、情報に対するモデルの考え方の多様さ、手法の多様さを改めて印象付けられるセッションであったと感じた。

セッション IIB: マルチメディア応用

座長: 藤代 一成 (お茶の水女子大学)

本セッションでは、マルチメディア・可視化技術を駆使した効果的なビジネス展開の方法論に関する興味ある報告が二件発表された。一件目の岩渕 幸雄氏の発表では、可視化の意義・効用のグローバルな視点からの解説と、開発コストを制限しつつも魅力ある起案書を可視化を用いて作成することの大切さを御自身の豊富な事例をもとに説かれていた。質疑を通じて、そうしたマニュアル作成の実践的引きとなるノウハウの公開を本学会主導で行なったらどうかというアイディアが引き出された。二件目の有田 幸弘氏の発表では、広告による企業イメージの伝達に関する統計的事例解析に基づいて、広告の因子分析、マルチメディアによるメディア強化・進化に関連して新たに生じる重要な問題（因子の修正、メディアへの到達可能性・公平さ、企業格差の促進、等）が議論された。

セッション IIIA: 情報検索基礎

座長: 根岸 正光 (学術情報センター)

本セッションでは、情報検索の手法にかかわる二件の発表が行なわれた。一つは論文を特徴付ける語の自動的識別に関するもので、もう一つは、研究分野を特徴付ける語群の析出に関するものである。いづれについても、出席者から、処理の第一段階における日本語の「語」の切り出し方式と辞書整備の問題と、第二段階での統計処理手法に関して、活発な質疑が行なわれた。コンピュータの能力向上に伴って、これらの可能性はますます広がっており、多様な研究の進展が期待される。

セッション IIIB: フルテキストデータベース

座長: 安澤 秀一副 (駿河台大学)

三本の報告に対して配分された時間はそれぞれ30分であった。それぞれの内容を考えると、時間超過を覚悟していたが、それこそビジュアライズされた御報告によって円滑に進行したこと、そして東洋の哲学と西洋の哲学がフルテキストデータベース化によって明快に把握できたこと、また料理というソフトな装いをとりながら、SGML という仕組みをかつちりと駆使して、テキストデータベースの有効性に貢献されたことを感謝したい。

特別講演

司会: 石塚 英弘 (図書館情報大)

藤井昌博凸版印刷（株）専務による特別講演「21世紀高度情報化社会に向けて」は、米国 CALS の最新状況の紹介に始まり、日本企業の情報化へのポイント、インターネット上でのマルチメディアが解説された。次いで、それを踏まえ、グローバルな競争下で、アプリケーションを決め手とする凸版印刷のマルチメディア・ビジネスの紹介があった。インターネットを使った最新ソフトのデモもあり、充実した講演であった。

全セッションを通じて、「情報の可視化」に関連する諸問題を情報知識学の範疇で正規に取り扱っていくには、旧来から意欲的な取り組みが続けられてきている、人間側の情報・知識の認知プロセスの効果的なモデル化の適用ならびに解析評価が肝要という感をさらに強めた。理論的側面からの接近と実践面からの接近の合流点を提供する本学会のユニークな特色を活かしたさらなる活動の必要性を痛感した次第である。

次年度の研究報告会は、平成9年5月24日（土）に、本年度と同じ凸版印刷本社ビル1階ホールにて開催される予定である。論文募集等の詳しい内容に関しては、次号以降のニューズレターの記事を参照していただきたい。

最後に、学会事務局を始め、本研究発表会開催に向けてご尽力いただいた関係諸氏に心よりお礼申し上げる。

発表論文要旨

[I-1] Scientific Visualization から Information Visualization へ

藤代 一成 (お茶の水女子大学)

「情報の可視化 (Information visualization)」と呼ばれる最新計算機技術を、従来の科学技術目的の可視化 (Scientific visualization) の発展形として捉え、その背景と目的を明らかにし、現状および効用を具体的な事例を用いて概説する。データベース技術と可視化技術の統合問題、新世代 GUI 研究開発、GII 時代の情報資源管理・利用の3点からの同技術の位置づけを行ない、情報知識学との関連性についても言及する。

[I-2] AVS/Express によるインフォメーション・ビジュアライゼーション

黒木 勇, 宮路 英生, 吉川 正晃 (ケイ・ジー・ティー (株))

コンピュータを利用した可視化、ビジュアライゼーションは、サイエンティフィック分野では必要不可欠なものに成長した。流体解析や構造解析、画像処理など、さまざまな分野で利用されている。昨今、インフォメーション・ビジュアライゼーションとして、これらの技術の新たな可能性が考えられ始めた。これまで、利用されてきた各コンピュータ・グラフィックス処理が、企業情報の分野でも利用されはじめている。

ビジュアライゼーションを利用することにより、多次元データの把握や複数データの合成表示、アニメーションによる動的な傾向の把握など、さまざまな利点が得られるようになってきている。本稿では、AVS/Express を利用した事例を中心に、その利点について紹介している。

[IIA-1] 意味理解のための情報構造モデルとその応用

藤原 譲, 安 江虹 (筑波大学)

意味処理を含む各種の思考支援機能を持つ情報システムを構築するには、従来のデータベースや知識ベースシステムでは表現形式や管理方式の制約が厳しく意味関係が十分に記述、表現できないため、より柔軟な情報モデルが必要である。

情報の意味は概念および概念間の関係によって記述される。本論文ではまず概念と概念関係の特徴を解析する。次にその特性を考慮した意味表現モデル均質化2部グラフモデルを紹介する。均質化2部グラフモデルはハイパーグラフを拡張したモデルで、情報概念構造の特徴（階層構造、内部構造、意味的な重なり、多項関係、動的関係、相対性など）を取り扱えるので今までのモデルより表現力が高い。その上、均質化2部グラフに基づいて有機合成情報モデルを提案する。最後に有機合成情報のモデル化と応用について述べる。

[IIA-2] 連歌語彙に見る情報の通性：普遍と個別、文章性・画像性・ファクト性の三態

藤原 鎮男, 立川 美彦 (国文学研究資料館)

表題の問題は、情報の特性の本質である。情報表現の主体部分を占める文章情報は、この特性を担っているはずであり、そのことは、文章を構成する用語・語彙に見られるであろう。そう考えて藤原は先に化学論文のキーワードの語彙の頻度解析（1）、および市町村の広報紙の紙面構成の分析をし（未発表）、この考えの検証を得た。我々は今回、連歌の語彙の解析をし、同様の結論を得ることが出来た。本研究は先の研究とあわせ、「情報」の本質の要素を明かにし得たと考える。なお、本研究は語彙の三態を明らかにした最初であろう。

[IIB-1] 情報知識学における可視化の効用と新規産業への応用について

岩淵 幸雄 (都築学園)

情報知識学における可視化の効用について、類似の可視化技術の応用例と比較して、知的生産性の向上と創造的な発展支援の優位性を示したい。比較の対象としては、医学分野のCT技術、電子工学のオシログラフ等、及び航空工学における気流観測の可視化等を予定している。

以上のような検討結果から、急速に発展してきたマルチメディア産業等の新規産業分野へ、この可視化の研究成果を応用して、実用的な成果が期待しうることを報告する。

[IIB-2] 企業イメージとマルチメディアについて

有田 幸弘 (凸版印刷)

企業イメージは、製品・サービスの成熟化により差別化が難しくなってきたこと、また企業と社会、あるいは企業と消費者などとの関係が多様化してきたことによって、企業にとって重要な課題となっている。

しかしながら、企業規模の拡大、事業の多角化などによって企業の発信する情報が増大したことで、人々の抱く企業イメージは拡散し、企業の素顔は見えづらくなっている。そうしたなか、これまで企業は主にマスメディアを通じたコミュニケーション活動を行ってきたが、マルチメディアの登場によって、よりパーソナルで深いコミュニケーションの対応が必要とされるようになった。それゆえ、ここでは企業イメージと現実味を帯びてきたマルチメディアの両者を取り上げ、企業コミュニケーション活動における相互作用を論じ、マネージメントの視点から今後のあり方を探るものとする。

[IIIA-1] 複数論文比較によるキーワード推定の試み

小山 照夫 (学術情報センター)

現在の情報検索システムの多くはキーワード検索を採用しているが、各文献へのキーワード付与は高度の専門性が要求され、従ってコストも高い作業となる。この問題を解決するために、文献そのものからキーワードを抽出する試みが注目される。本論文では情報処理分野の約250の文献について、1. 用語の全文献あたり出現率と文献あたり出現率との比較、2. 用語の出現する文献数、3. 同一文章における用語の共起関係を基に、キーワードの推定を試みた。ランダムサンプルによって選んだ10論文について抽出結果を検討した結果、抽出された語の50-70%程度が妥当なキーワードとみなせ、また、これらのキーワードは抽出すべき全キーワードの60-70%程度に当たるという結果が得られた。

[IIIA-2] 多数の語を用いた検索質問の作成と評価

石田 栄美, 宇陀 則彦, 石塚 英弘 (図書館情報大学)
根岸 正光 (学術情報センター), 山本 毅雄 (図書館情報大学)

研究分野など、大きな内容グループ全体を目標とする日本語テキストデータの検索のための、多数の語を用いた検索質問の自動作成とその評価について報告する。ここで提案する手法は、複数の内容グループ（ここでは三つの研究分野）の日本語テキストデータを自動分かち書きシステムによりそれぞれ単語に分け、これらの単語のうち各グループに対する出現率に十分大きな差があるものの全部を、そのグループの検索語として用いることである。

3つの分野（情報処理学、農芸化学、土木学）の抄録各約2000件を、学術情報センターのGAKKAIデータベースからダウンロードし、これを約1000件づつに分けて、検索質問作成の材料と検索評価の対象とした。検索質問作成には、ある分野の抄録中の単語を、複数ハッシュふるい分けによる日本語分かち書きシステムMHSAにより切り出した「分野総単語リスト」と、分野の特徴を表わすため、語の各分野における出現率の比が、ある程度以上大きい（場合のある）単語を抽出した「分野特定単語リスト」を作成した。これらを用いて対象データを検索し、各リストに含まれる語の各抄録中での出現率を統計的に検討した。

この結果、「分野特定単語リスト」を用いる検索により、上記3分野の抄録をあわせた対象データを、96分類誤りの原因についても考察した。

[IIIB-1] 電子テキスト化された三浦梅園の主著『玄語』：江戸時代のハイパーテキストを読み解く

赤星 哲也(日本文理大学), 北林 達也(三浦梅園研究所)

我々は江戸時代中期の自然科学思想家である三浦梅園の主著『玄語』を電子テキスト化し、これをもとに grep などのテキスト・ユーティリティを用いて解釈作業を試みてみた。その結果、『玄語』は梅園が構想した地球生態系に関する論理モデルの命題群の集まりであり、これを「反観合一」という梅園独特の思考方法(“思考のエンジン”)を駆使して記述した“構造化”されたテキストであることが判明した。「反観合一」の思考方法は「万物・万象に対称性を観る」というものであり、梅園はこれを体系化するにあたり、(1) 記述の対称性、(2) 万物・万象間の円環的関係性の二点を重視した上で、論理的整合性を追求したテキストとして表現した。このため、『玄語』は至るところに線形的な記述の破れが見られ、また、解読するのに円環図との関連付けを必要とすることから、我々は『玄語』そのものが“紙”メディア上に表現された“ハイパーテキスト”であると考えに至った。本発表ではこの間の経緯の詳細を報告するとともに、今、報告者らが試みている『玄語』のハイパーテキスト化構想の概要について紹介してみたい。

[IIIB-2] フッサール・データベースの新段階：データの追加とホームページの開設

浜渦 辰二(静岡大学)

わたしは、二年ほど前から共同研究者とともにフッサール・データベースの構築に取り組んでいます。フッサールというのは現代ドイツの哲学者(1859-1938)で、死後膨大な未刊草稿を残した人です。テキストの性格上、電子テキスト化されることが期待されて来ました。わたしたちは最初の年(1994年)、『フッサール全集』の5巻分についてフルテキストを作成し、それを公開したいと考えていましたが、著作権をもっているオランダの出版社から許可を得られませんでした。そこで、わたしたちはさきのフルテキストに対して検索ソフトを使って、400余りのキーワードについて検索作業を行い、この検索結果のみをインターネットのFTPを利用して、昨年1995年4月に「フッサール・データベース」として公開するに至りました。したがって、それは『フッサール全集』における特定のキーワードについての検索結果を集めたものです。その後もわたしたちは作業を継続し、同全集の新たに6巻分についてフルテキストを作成し、同様に作成された検索結果を、今年1996年4月にフッサール・データベースに追加することができました。また同時に、わたしたちはWWW上にフッサール・データベースのホームページを開設いたしました。

[IIIB-3] 料理データベースを用いた献立表とレシピの半自動生成

市川 哲彦, 八代 夕紀子(お茶の水女子大学)

通常のデータベース検索では要求仕様に合致したデータを求めることに主眼がおかれるが、データベースシステムを核とした応用システムを考えた場合は、検索結果を加工し、用途に合った形式のデータを作成することが最終的な目的である。そこで本研究では、応用例として料理データベースを考え、価格、栄養価、利用できる材料などのユーザ入力に対して、週間献立表生成と、材料入れ換えを伴うレシピの半自動生成を行なうシステムを構築した。ここでは料

理の分類や、使用される材料とそれらの栄養価や価格変動からなる基本的な構造データベースに、SGML 文書からなる調理手順と、材料の分類、入れ換え可能性、および一般的な前処理からなる知識ベースを利用することで、これらの処理を可能にしている。

[特別講演] 21 世紀高度情報化社会に向けて

藤井 昌博 (凸版印刷 (株) 専務取締役)

現在、日本企業はマルチメディア関連事業とインターネット・ビジネスに先進的な取り組みを行っているが、求められる情報化へのポイントは5つあり、それを実現するためには新しい仕組みや、組織・制度の改革が不可欠である。

印刷会社がこのマルチメディア化を積極的に進めている背景には、印刷会社は市場密着型で、企業提案型の情報加工・サービス産業という特徴を備えているからである。

凸版印刷が取り組んでいるマルチメディアの最新事例を実演しながら、ネットワークビジネスの可能性とグローバル性を紹介する。

情報知識学会 平成8年度総会議事録

1. 名 称 平成8年度総会
 2. 開催年月日 平成8年5月25日(土) PM4:30~5:00
 3. 会 場 東京都千代田区神田和泉町1番地
凸版印刷株式会社本社ビル1階ホール
 4. 議 長 藤原鎖男会長
 5. 総会式次第・議題 ・司会 藤原譲副会長
 - (1) 開会 ・出席者数確認と総会の有効成立確認 五所事務局長
会員数314名 出席者数42名 委任状数80枚 計122
総会定足数(会員の10%)よって今総会は成立
・開会宣言 藤原会長
・会長挨拶 藤原会長
 - (2) 報告事項 安澤副会長
・平成7年度事業報告(総会資料通り)
 - (3) 承認事項
・平成7年度収支決算報告(コデータ部会を含む) 月見里副会長
・監査報告 月見里副会長
・平成8年度事業計画説明 藤原会長
・平成8年度収支予算説明(コデータ部会を含む) 月見里副会長
・役員改選の件 藤原会長
- ★上記の通り、報告・承認された。
★上記詳細については後掲の総会資料通り。

情報知識学会 平成8年度総会資料

1. 平成7年度事業報告

①会議

・平成7年 4月24日	17:30～19:30	理事会	於：凸版印刷
・平成7年 5月27日	16:30～17:00	総会	於：凸版印刷
・平成7年 7月 3日	17:30～19:30	理事会	於：凸版印刷
・平成7年 9月18日	17:30～19:30	理事会	於：凸版印刷
・平成7年11月27日	18:00～20:00	理事懇談会	於：凸版印刷
・平成7年12月11日	17:30～19:30	理事会	於：凸版印刷
・平成8年 2月16日	18:00～20:00	理事懇談会	於：凸版印刷
・平成8年 3月12日	17:30～19:30	理事会	於：凸版印刷

②講演会・セミナー・シンポジウム

- ・「情報知識学会・第3回（1995年度）研究報告会」主催 於：凸版印刷
平成7年5月27日
- ・「安全・危機管理フォーラム」国際科学振興財団と共催 於：三菱総合研究所
平成7年7月18～19日
- ・「危機管理教育」シンポジウム主催 於：学士会館
平成7年7月20日
- ・「第5回・歴史研究と電算機利用」ワークショップ（人文社会系部会）開催
平成7年9月9～10日
- ・「第3回著作権勉強シンポジウム」主催 於：凸版印刷
平成7年9月22日
- ・「第3回人工物工学シンポジウム」協賛 於：東京大学山上会館
平成7年10月10～13日（主催：東京大学人工物工学研究センター）
- ・「国際地球情報シンポジウム」地質学会、大阪市と共催 於：大阪国際交流センター他
平成7年10月29日～11月2日
- ・理研シンポジウム「先端的研究機関における情報環境」後援
平成7年11月16日（主催：理化学研究所）
- ・第10回「大学と科学」公開シンポジウム 文部省その他と後援 於：日経ホールその他
情報スーパー・ハイウェイ加速する研究・教育・医療ー 平成7年12月5～6日
- ・「1996年・情報学シンポジウム」日本学術会議と共同主催 於：日本学術会議講堂
平成8年1月17日～18日 本学会から石塚理事が実行委員として協力

③刊行物

・ニューズレター 31号	平成7年4月1日発行
・第3回(1995年度)研究報告会講演論文集	平成7年5月27日発行
・ニューズレター 32号	平成7年6月1日発行
・ニューズレター 33号	平成7年8月1日発行
・情報知識学会誌第5巻第1号(SCRM特別号)	平成7年7月20日発行
・ニューズレター 34号	平成7年10月1日発行
・ニューズレター 35号	平成7年12月1日発行
・情報知識学会誌第5巻第2号	平成7年12月25日発行
・ニューズレター 36号	平成7年2月1日発行

2. 今年度事業計画

- ①会議
- ・総会 平成8年5月25日開催
 - ・理事会 年4回開催
- ②講演会・シンポジウム
- ・第4回(1996年度)研究報告会開催(5月25日)
 - ・その他
- ③共同研究
- ・SGML/CALS、知的財産権、SCRM(環境を含む)、マルチメディア、ビジュアライゼーション。
- ④刊行物
- ・ニューズレター 第37号～42号発行予定
 - ・学会誌 第6巻第1～2号発行予定
 - ・第4回(1996年度)研究報告会講演論文集発行
 - ・その他(研究会報告、テキストなど)

3. 役員人事

会長	藤原 鎮男	東京大学 名誉教授
副会長	藤原 譲 安澤 秀一 企業関連1名	筑波大学 教授 駿河台大学 教授
理事	芦崎 達雄 有川 節夫 石塚 英弘 岩田 修一 (新任) 岩淵 幸雄 開原 成允 加藤 寛次 後藤 智範 (新任) 斉藤 雅 小山 照夫 菅原 秀明	日本科学技術情報センター 九州大学 教授 図書館情報大学 教授 東京大学 教授 学校法人都築学園 講師 国立大蔵病院 病院長 (株)日立製作所 主任研究員 神奈川大学 教授 大日本印刷(株) 部長 学術情報センター 教授 国立遺伝学研究所

田隅 三生	埼玉大学 教授
次田 皓	東京理科大学 教授
長瀬 眞理	リール第3大学 客員教授
中山 堯	神奈川大学 助教授
名和 小太郎	関西大学 教授
西脇 二一	奈良大学 教授
根岸 正光	学術情報センター 教授
(新任) 深見 拓史	凸版印刷(株) 本部長
藤代 一成	お茶の水女子大学 助教授
松田 芳郎	一橋大学 教授
山本 昌弘	日本電気(株) C & C 研究所長
学会総務担当 1 名	

監事	穴戸 駿太郎	環日本海経済研究所副理事長
	月見里 禮次郎	えんがわ 代表

評議員会		
議長(兼務)	藤原 鎮男	東京大学 名誉教授
評議員	岡野 弘行	日本科学技術情報センター
	柏木 寛	(株)トッパン・グループ 総研 研究所長
	小島 裕	プロセス資材(株) 代表取締役社長
	中根 康雄	中根速記学校 理事長

4. 会員数

	H 7.3.31現在	H 7.4.1 ~ H 8.3.31		H 8.3.31現在
		入 会	退 会	
正会員	293人	23	9	307人
学生会員	3人	5	1	7人
賛助会員 ()は口数	14法人 (43)	1 (5)	0 (0)	15法人 (48)
合 計	310	29	10	329

平成 7 年度 収支決算

収 支 計 算 書		平成 7 年 4 月 1 日から 平成 8 年 3 月 3 1 日まで		(単位: 円)
	予 算 額	決 算 額	差	異
収 入 の 部				
1. 会費収入				
法人会員会費	1,290,000	1,440,000		150,000
個人会員会費	1,350,000	1,172,500	△	177,500
2. 事業関係収入				
学会誌・別刷代	50,000	532,000		482,000
講演論文集代	70,000	167,400		97,400
懇親会参加料	100,000	17,000	△	83,000
3. その他の収入				
雑 収 入	0	22,800		22,800
預金金利	5,000	10,408		5,408
当 期 収 入 合 計 (A)	2,865,000	3,362,108		497,108
前 年 度 繰 越 金	1,720,225	1,720,225		0
収 入 合 計 (B)	4,585,225	5,082,333		497,108
支 出 の 部				
1. ニュースレター 編集部門				
印刷代・送料	2,000,000	2,441,632		441,632
編集経費等	50,000	104,470		54,470
2. 学会誌編集部門				
印刷代・送料	300,000	1,498,650		1,198,650
編集経費	0	0		0
原稿料	0	0		0
3. 企画部門				
セミナー備品等	0	3,000		3,000
講師謝礼等	20,000	138,310		118,310
4. 研究報告会				
講演論文集印刷代	120,000	103,000	△	17,000
懇親会経費	100,000	201,377		101,377
5. 総務部門				
入会案内作製費	100,000	0	△	100,000
理事会実施費用	150,000	137,100	△	12,900
6. 事務局・その他				
事務用品代	50,000	43,625	△	6,375
通信費	100,000	120,925		20,925
印刷代(封筒等)	30,000	61,759		31,759
振込手数料	10,000	7,622	△	2,378
総会実施経費	50,000	58,900		8,900
その他	5,225	7,520		2,295
	(計3,085,225)	(計4,927,890)		(計1,842,665)
次 年 度 繰 越 金	1,500,000	154,443	△	1,345,557
当 期 支 出 合 計 (C)	4,585,225	5,082,333		497,108
当期収支差額 (A) - (C)	△ 1,720,225	△ 1,720,225		0
次期繰越収支差額 (B) - (C)	0	0		0

情報知識学会決算書・予算書

1. 平成7年4月1日から平成8年3月31日までの決算書

(単位：円)

収入の部		支出の部		
収入科目	収入金額	部 門	使用科目	使用金額
前年繰越金	1,720,225	ニューズレター 編集部門	印刷代・送料	2,441,632
会費収入	2,612,500		編集経費等	104,470
利息	10,408	学会誌編集部門	印刷代・送料	1,498,650
学会誌・別刷代	532,000		編集経費	0
懇親会参加料	17,000		原稿料	0
講演論文集代	167,400	企画部門	セミナー備品等	3,000
雑収入	22,800		講師謝礼等	138,310
		研究報告会	講演論文集印刷代	103,000
			懇親会経費	201,377
		総務部門	入会案内作製費	0
			理事会実施費用	137,100
		事務局・その他	事務用品代	43,625
			通信費	120,925
			印刷代（封筒等）	61,759
			振込手数料	7,622
			総会実施経費	58,900
			その他	7,520
		小計		4,927,890
		予備金（次年度繰越金）		154,443
合計	5,082,333	合計		5,082,333

2. 平成8年度予算書

(単位：円)

収入の部		支出の部		
収入科目	収入金額	部 門	使用科目	使用金額
前年繰越金	154,443	ニューズレター 編集部門	印刷代・送料	1,200,000
会費収入*	2,800,000		編集経費等	120,000
利息	5,000	学会誌編集部門	印刷代・送料	800,000
学会誌・別刷代	30,000		編集経費	20,000
懇親会参加料	20,000		原稿料	0
講演論文集代	150,000	企画部門	セミナー備品等	10,000
雑収入	40,557		講師謝礼等	20,000
		研究報告会	講演論文集印刷代	150,000
			懇親会経費	50,000
		総務部門	入会案内作製費	0
			理事会実施費用	150,000
		事務局・その他	事務用品代	50,000
			通信費・送料	120,000
			印刷代（封筒等）	100,000
			振込手数料	10,000
			総会実施経費	30,000
			交通費その他	170,000
		小計		3,000,000
		予備金（次年度繰越金）		200,000
合計	3,200,000	合計		3,200,000

*会費収入は平成8年3月31日現在の会員数（別表）より算定

貸借対照表			
平成8年3月31日現在（単位：円）			
科 目	借 方	貸 方	
1. 資産の部			
現金	0		
普通預金（三和銀行）	657,107		
郵便振替口座	726,980		
定額郵便貯金	500,000		
2. 負債の部			
前受金（普通預金）		654,000	平成8年度年会費
前受金（郵便振替口座）		715,500	平成8年度年会費
3. 正味財産		514,587	
（内当期正味財産増加額）		(231,792)	
合 計	1,884,087	1,884,087	

監査報告書

情報知識学会

会長 藤原 鎮男 殿

作成日 平成8年5月8日

情報知識学会 監事 穴戸駿太郎



情報知識学会 監事 米田 幸夫



当監事は、情報知識学会定款第19条に基づく監査証明を行なうため、情報知識学会の平成7年4月1日から平成8年3月31日までの財務諸表について監査を行ないました。

この監査に当たって、当監事は一般に公正妥当と認められる監査基準に準拠し、通常実施すべき監査手続きを実施致しました。

監査の結果、当監事は上記財務諸表が平成8年3月31日現在の情報知識学会の財務状況を適正に表示しているものと認めます。

<お知らせ>

NIFTY-Serv会議室をご活用ください

パソコン通信ネット・ニフティサーブの中にある歴史フォーラム(FREKI)16番会議室は、情報知識学会専用のサロンです。昨年4月に開設以来、皆さまから色々なご発言が寄せられ、現在200を越えています。その内容を多くの学会員に読んで頂けるよう、発言者のご了解を得て電子メールで転送しています。しかし、ニフティサーブのID番号かインターネットのメールアドレスを情報知識学会事務局へ登録された方は、会員全体の約12%に過ぎません。

(1) 会議室での発言をお読みにになりたい方は、メールアドレスをお知らせください。

従来、この手動式メーリング・リスト的な転送を受けている方で、煩雑さにお困りの場合はいつでもお知らせください。リストから除外します。

(2) ニフティサーブの会員でなくても、会議室へ発言なさりたい方は、事務局へメールを送信してくだされば、そのまま会議室へ掲示します。お気軽にご利用ください。

(3) ニフティサーブへ入会をご希望の方には、メンバーズパック(¥5150)を無料で差し上げますので事務局へお申込ください。

(4) 今後、上記会議室の内容をニューズレターに随時掲載するよう準備しています。発言者にはご了承頂きたいと思います。もし、掲載不可の場合はご遠慮なく発言文中にその旨を表示なさるか、別途メールでご連絡ください。

以上、よろしくお願いします。ご意見もお寄せください。

情報知識学会事務局

■編集後記

年間6回のニューズレター発行は、編集委員会にとってかなりの負担になります。そのため年2回は事務局が分担することになりました。今号はその第1回目です。

しかし、実際にはその大半について後藤編集長(神奈川大学)の手を煩わせ、藤代理事(お茶の水女子大学)は短時日で原稿を揃えて頂きました。編集を無事終り、感謝します。 五所吉哉

■複写をされる方に

R <学協会著作権協議会委託>

日本国内における、当ニューズレターからの複写許諾は、学協会著作権協議会から得てください。

学協会著作権協議会

〒107 東京都港区赤坂9-6-41

TEL:03-3474-4621, FAX:03-3403-1738

アメリカ合衆国における複写については、Copyright Clearance Center, Inc. から得てください。

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA. 01923, USA

TEL: 508-750-8400, FAX: 508-750-4744